日本民家園だより

特集　旧原家住宅

vol.68

企画展示「川崎の近代和風建築－旧原家住宅－」
2008年7月1日（火）～11月24日（月祝）
『日本民家園収蔵品目録10　旧原家住宅』刊行

写真：原家住宅の階段

原家のはなし

1．はじめに

民家園に入るとすぐ右に、ガラスまどのある大きな家が見えます。これが原家です。この家はもともと、川崎市のまん中、中原区の小杉陣屋町にありました。たてはじめたのは明治43年（1911）、できたのは大正２年（1913）です。しかし、木を切り出し、かわかすのに長い時間をかけ、それをふくめるとできあがるまでに22年かかったとつたえられています。

よい木をたくさん使い、すぐれたわざで作ったこの家は、川崎を代表する近代和風建築として、市の重要歴史記念物になりました。川崎市のたからものとして、みらいまでのこそうと決められたのです。

2．原家のたてもの

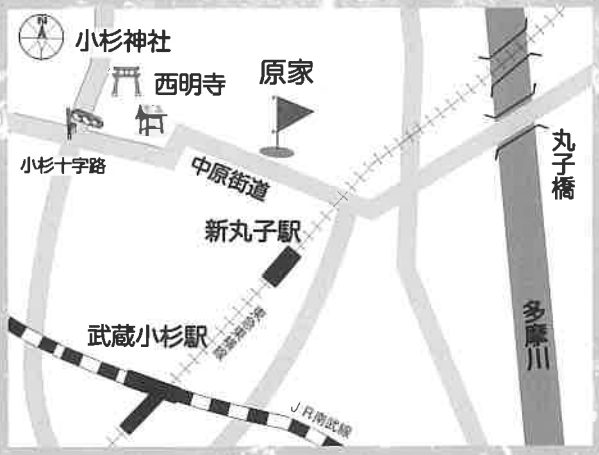
（1）近代和風建築とは

いま「近代和風建築」というむずかしいことばを使いました。まず、これについてお話ししましょう。

近代和風建築とは、かんたんに言えば、明治のはじめ（1868）から昭和20年（1945）までのあいだに、昔からのやり方、昔からの形を生かして作られた木のたてもののことです。原家のような住まいだけでなく、旅館やお店などもあります。

江戸時代には、ふつうの人はお金があってもぜいたくな家はたてられませんでした。決まりがあったからです。明治時代になってこの決まりがなくなると、お金のある人たちは、それまでゆるされなかったような家をあちこちでたてはじめたわけです。

そのころは、外国からさまざまな文化が入ってきた時期でもありました。そのため、新しいくらし方に合わせて作りもくふうし、一部には外国ふうの形も取り入れました。日本の大工さんのわざはこのころもっとも高いところまで来ていましたから、そうしたわざをいろいろな場所に生かすことができたのです。



（2）わざのいろいろ

では、原家にはどんなわざが使われているでしょうか。そのれいとして、「継手」と「仕口」についてお話しすることにします。

原家は木でできています。いろいろな形の木を組み合わせて、この大きな家のほね組みができあがっているのです。継手と仕口とは、どちらもその木の組み合わせ方のことです。

まず、２本の木のぼうを思いうかべてください。この２本をつないで長くすることを「つぐ」といいます。そして、そのつないだところを「継手」といいます。

こんどは、１本の木にもう１本を直角に組み合わせてみましょう。このように組み合わせるとき、そのつないだところを「仕口」といいます。

継手にも仕口にも、さまざまなやり方があります。その中で、ふつうは使わないやり方が原家にはたくさん使われています。できあがってしまうと見えませんが、見えないところまで大工さんが注意深く作り上げたのが、この原家という家なのです。

（3）原家の工事

こんどは大工さんの話をしましょう。

工事には大ぜいの大工さんが来ます。その大工さんたちのリーダーを「棟梁」といいます。原家をたてるとき棟梁をつとめたのは、中原区新城の市川登代次郎さんです。登代次郎さんのおくさんの父・喜八さんは原家の倉の棟梁ですから、２代にわたって原家で棟梁をつとめたことになります。

原家には、主にケヤキという木が使われています。横浜の荏田に原家の山がありましたので、そこから切り出し、柱やゆか板にしました。イマに入ってみてください。入って右に板でできた戸があります。これらもみなケヤキです。どこにもつなぎ目がないことからわかるとおり、１本の大い木から作ったものです。昔はきかいがありませんから、木挽きという職人さんが自分のうでだけでやったわけです。しかし、この仕事をしたとき１まいだけミスしてしまいました。そのため、この戸の一番左は戸だなになっているそうです。

屋根を作ることを、「屋根をふく」といいます。原家の屋根をふいたのは、かわら職人の松本辰吉さん菊次郎さん親子です。屋根を見てみましょう。○に「イ」の入ったマークがあるのに気づいたでしょうか。このマークは原家のしるしです。話はそれますが、昔の家は名字のほかに屋号というものがありました。同じ名字の家がまとまって住んでいたので、ニックネームでよんだのです。このマークは、原家の屋号「イシバシ」の「イ」からとったものです。

このほか、しょうじやふすまなどは東京の職人

さんが作ったもの、ガラスはドイツからとりよせたものです。原家のガラスを見てください。水の中をのぞきこんだように、波うって見えます。このガラスは、作り方が今とはちがうのです。

3．原家の仕事

（1）肥料店

原家は中原街道ぞいにあり、そこで代々商売をしていました。つぎに、原家の仕事を見ていきましょう。

原家は、江戸時代の天明4年（1784）に肥料を売る店をはじめました。そのころの様子はわかりませんが、明治時代に仕事をついだ親せきの話がのこっています。

売っていたのは、野田（千葉県）の「しょう油かす」や北海道のニシンの「しめかす」でした。しょう油かすというのは、しょう油を作ったあとののこりです。しょう油は大豆から作りますから、このこりにも栄養があり、畑の肥料に使えたのです。もうひとつのしめかすというのは、ニシンという魚から油をとったあとののこりです。こちらも栄養があり、畑のよい肥料になりました。

こうした肥料は、船で多摩川の下流にある六郷まで運ばれてきました。これをまた川船にのせて多摩川をさかのぼり、新丸子あたりまで運んだそうです。

（2）地主

原家は広い土地を持っていました。人の土地をふまずに川崎大師まで行けたとか、綱島まで行けたとか、そんな話がのこっています。武蔵小杉のイトーヨーカドー、東横病院、大西学園、法政二高などは原家の土地でした。そのほか、新丸子、井田、木月、東京の用賀、横浜の荏田などに土地がありました。

原家では「差配」という係の人をおいて、これらの土地を守っていました。土地はほかの人にかしていましたので、その代金を差配が集めてまわったのです。

（3）銀行

明治33年（1900）、原家9代目の文次郎さんはおじの小林三左衛門さんと銀行をはじめ、頭取、つまり社長になりました。この銀行を玉川銀行といいます。本店は原家のそば、西明寺のすぐ近くにありました。

銀行といっても昔のことですから、ふつうの家と同じかわら屋根のたてものでした。戸を開けると中にたたみの部屋があり、そこで仕事をしていたのです。

この銀行は東京の馬込など数か所に店を開いていましたが、昭和7年（1932）に仕事を終えました。

（4）料亭

戦争のあとは原家もたいへんでした。そのため、昭和24年（1949）から数年間、料亭（料理を出す店）を開いていました。店の名前を「陣屋荘」といいます。

陣屋荘には料理をする人が4、5人、そのほか女中さんとして近所の人がパートで来ていました。お店に使っていたのは、主に1階南がわの部屋です。お客さんは会社の人が多く、丸子や綱島から芸者さんがよばれることもありました。当時、丸子で行われていた花火大会のときは、いっぱいになったそうです。お客さんの中にはとまる人もいました。

けっこん式をすることもありました。日枝神社（中原区上丸子山王町）の神主さんをまねいて1階のオクザシキで式をあげ、2階でおいわいをしたそうです。

4．原家のくらし

原家は、おじいさんおばあさん、お父さんお母さん、それから子どもたちがくらす大家族でした。そのほかおてつだいさんも住んでいました。おてつだいさんは多いときで7、8人、子どもに1人ずつついていた時代もありました。おてつだいさんがけっこんするときは、原家でタンスなどを買い、嫁入りのしたくをしたそうです。

原家は家も庭も広かったので、それを守るのに大工さんや植木屋さんなど、職人さんが毎日のように来ていました。原家では職人さんたちの食事の用意をし、おぼんや正月前には原家のしるし入りのハンテン（仕事用の着物）を配りました。職人さんたちはもちつきやおそうしきのときなどはこれを着て集まり、仕事をてつだったのです。

このほか、原家は神奈川県議会議員をつとめていたこともあり、いろいろな人が来ました。子どもたちもまた、原家の庭で遊びました。原家は町の中心として地元をささえ、またささえられてもきたのです。

5．おわりに

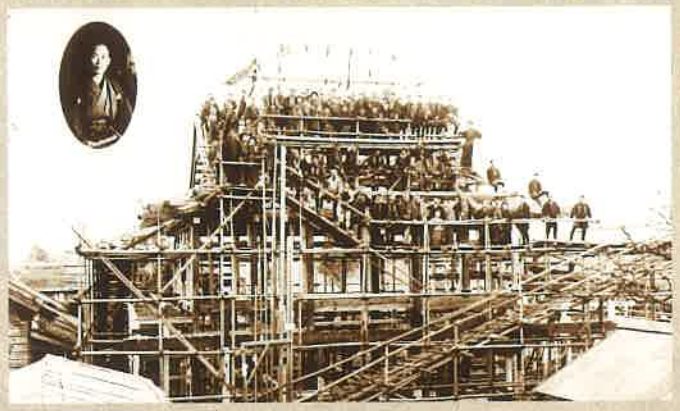
原家11代目の正巳さんは、先祖のたてた家にとってどうするのが一番かを考え、民家園にうつすことを決めました。それでも、家をこわして柱が全部はずされたあと、心配がたまってたおれてしまったそうです。一家の主人にとって、家というのはそれほど重いものなのです。

家は民家園にうつりましたが、先祖代々の地は今も12代目の正人さんが守っています。中原街道を通ったら原家の門をさがしてみましょう。町なみはかわっても、そこには昔からの風景があります。

（渋谷卓男）

背景写真：移築前の原家住宅

旧主屋　門のむこうに茅葺の屋根が見える　民家園に移築された主屋が建つ以前のもの



上棟式（明治44年）　左上の写真は9代目文次郎氏

原家の人々（昭和2年）　右から2番目が9代目文次郎氏、5人目が10代目正一氏

庭（昭和63年）　右上に見えるのは外倉

文庫蔵棟札　（明治28年）

主屋棟札（明治44年）

日本民家園だより　vol.68　発行：平成20年7月1日

川崎市立日本民家園　URL　http://www.city.kawasaki.jp/88/88minka/home/minka.htm
〒214-0032　川崎市多摩区枡形7-1-1　TEL　044(922)2181　FAX　044(934)8652　交通:小田急線「向ヶ丘遊園」駅南口下車徒歩13分
開園時間　[3～10月]午前9時30分～午後5時　[11～2月]午前9時30分～午後4時30分　入園は閉園30分前まで
休 園 日　毎週月曜（祝日の場合は開園）、祝日の翌日（土・日曜の場合は開園）、12月28日～1月3日
入 園 料　一般500円、高校・大学生300円、65歳以上300円（川崎市在住の方無料）、中学生以下無料